

ODAWARA LOVELY LIFE LIBRARY
おだわらライブラリー通信
 第貳号
 小田原の文化資源を発掘する◆小田原市民会館のストーリーを紡ぐ

市民の日常活動が紡いできた市民会館ストーリー

小田原市民会館では、五〇年近い歴史の中で名舞台が積み重ねられてきました。著名な演奏者や歌手・俳優による舞台や、NHKの「おかあさんといっしょ」やドリフターズの生放送などもありました。一方で、市民自身の手による、忘れがたい舞台が数えきれないほど上演されました。

そういう目で見れば、市民会館の大ホールだけではなく、本館にある小ホールや会議室での市民の日常活動こそが、市民会館の歴史を日々紡いできたと云えるのではないのでしょうか。今後、建設が計画されている「芸術文化創造センター」が、市民の日常活動を支える場となり、市民活動がますます盛んになって欲しいと思います。

(ライブラリー隊員 深野彰)

シヤム猫カンパニー社長の露木一郎さんは、八〇年代に高校生が自主的にプロデュースしてコンサートを開催する企画「ハイスクールライブ〜卒業〜」を、八年間続けました。割り当てられた七分間の舞台で、音も出ずに演奏時間が終わって回り舞台が廻ってしまった子もいたそうです。それもまた青春時代の市民会館の思い出となったことでしょう。

井上楽器社長の井上忠彦さんからは、労音が盛んだった七〇年代のコンサートの話や、男声合唱団の結成など、小田原市民が音楽を楽しむ場を作り、市民会館でリサイタルを開いてきた歴史をお聴きしました。井上さんは、「私が常に考えているのは、日常活動なんです。だから、市民が日常活動できる場が欲しいですね」と語られました。市民会館とは、活動成果を発表するだけの場ではなく、日常活動を支える場こそがより重要なのではないか、と思います。

広報おだわら

発行所	小田原市役所
小田原市役所	小田原市中央1-138
編集兼発行人	鈴木幸哉
文芸部	文芸部
印刷	全世帯配布

待望の市民会館完成
 福祉の増進・文化の向上に期待

第五郎 劇団で **こけら落とし**
 開館式に約八百名が参列



会館正出入口のテープを切る鈴木市長

ヘリコプターで薬剤散布
 八月十一日 いもち病防除



写真は第五郎劇団による舞式三番とす

市民会館完成を伝える広報おだわら(昭和38年8月)



開館当時の大ホールロビー

ライブラリー通信第貳号では、音楽事業に携わった井上楽器社長の井上忠彦さん、シヤム猫カンパニー社長の露木一郎さんのお話と、小田原を見つめ続けてきた五十嵐写真館の三代目主人、五十嵐史郎さんのお話を掲載いたします。

■小田原市民会館の「特異性」

市民文化の諸施設としての市民会館は、昭和三十七年に大ホールが完成、次いで本館も昭和四十年に完成。この本館は、各種の集会のための多目的小ホールと結婚式場として会議室で構成されていました。会館完成当時から関わりを持たれていた方のお話によると、小田原市民会館には他の会館と比べて「特異性」があるとのことでした。

特異性を造り出しているのは、小田原城。関連景観修景で高い建物が建てられないために、地下にステージが作られており、機材を搬入するには、トラックから荷物を降ろして、リフトに乗せてグーツと下がって、また降ろすという大変な作業をしなければならぬ。機材の搬入で地下に降りて行くというのは、近隣では小田原市民会館しかなかったそうです。作業中にリフトから転落してしまった人もいたそうです。

舞台関係では回り舞台があり、歌舞伎の公演も毎年、開催されていました。しかし舞台の裏や袖(待機スペース)が狭く、上手(かみて)の転換ができない。下手(しもても)ほとんどスペースがないため、セットの出し入れやシーンの転換が難しく、スタッフの皆さんは苦労したようです。

また、利用目的で一番多いのが、小田原市民の利用で、合唱団、演劇、そして式典・セレモニーなど。こうした市民利用で会館の予約が占められていることも、他の地域と比べると珍しいことだそうです。その代り、ショー(興行)というものがほとんどなかった。これは、前述の舞台や搬入などが影響しているということです。

(ライブラリー隊員 高塩英芳さん)

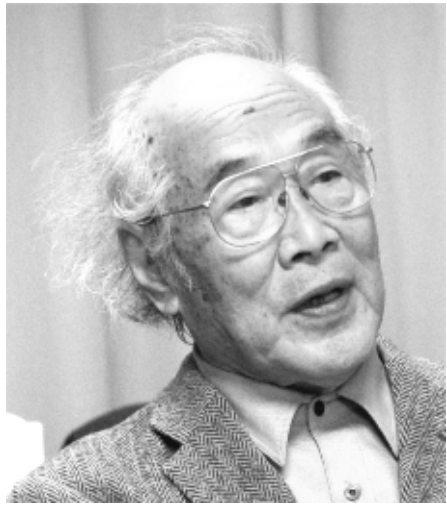
日常の中に、もっといい音楽を。

井上忠彦さん（井上楽器社長）

『労音』は『小田原勤労者音楽協議会』という名称で、会員がお金を持ち寄って運営する組織です。労音などができた背景には、戦後、音楽会などに飢えていた背景があったと思います。それで、とにかくいい音楽会をやろう、その「いい音楽会」をやるためにはどうするか、と。大阪に「労音」というのができたと聞いて、小田原でも作ろうか、という動きになりました。そのときは一六〇〇人くらい会員が集まりました。その頃は本町小学校の講堂で、一旦三回公演を行いました。

組織をどうするか、と、私が音楽のほうにいろんな知り合いがいたので、そういう人をまとめて欲しい、ということでも走り回りました。当時は組合が強かったもので、松野久雄さんという小田原労音の委員長になった方が、地区労の委員長で、日本通運の委員長でもあったんですね。それで「松野さん、労働組合のほうまで調べてくれよ」と。あの時分、富士フィルムの会員なんかが多かったですね。

元々、私は男声合唱をやっていました。神奈川の男声合唱協会をつくり、その協会も小田原で運営しました。日本の男声合唱協会もやりました。藤沢で音楽会をおやりになった福永陽一郎さん（指揮者・音楽評論家 1926・1990）から「男性をまとめる」というアドバイスを頂いたんですね。男は理屈が多く



てまとめが大変なんです。小田原で男声合唱団を作るようになって、運営などがうまくまとまるようになりまし

その中でも、一九七三年にベートーヴェン交響曲「第九」をやりました。小田原市だけでなく足柄平野全体の人を巻き込んで、賑やかにやるならば「第九」だろう、ということ。合唱もやりながら公演のマネジメントも担当していました。あまり忙しさに、いざ本番になって舞台上に立つたら声が出なくなりました。思い出があります。

合唱にも市民がたくさん入って、全部ステージに乗らないのではないかと思うほど集まり、実際に舞台袖のほうまで来ていましたね。合唱で二百人、オーケストラで八十人。舞台はいっぱいいます。それから「第九」は、何回もやりました。

労音のほうでは、途中で「労演」というものもできて、ミュージカル「劉三姐（リウウサンジェ）」という催しもやりました。小田原でも一日三回公演、賑やかにやりましたね。三ステージでできるだけの資金があったんですね。六〇年代から七〇年代のはじめにかけては、た

くさん事業を行いました。とにかく無我夢中で動きましたね。

それがだんだん、労音以外の事業や、人々の嗜好が幅広くなりました。相当な資金力で運営しないとできなくなりました。手作りの音楽会は、労音ではやりにくくなりました。

現在の小田原の楽友協会、あれは私が、地元出身の演奏家を中心とした演奏会、室内楽のコンサートをやりたいと思いついて始めた流れが、いまの楽友協会へと続いています。最初は、小田原市民会館のホールの響きがよくな



市民による音楽フェスティバル

いので南足柄を使っていたんですけど、なぜ小田原市民会館を使わないのか、という意見を受けて、やるようになりました。小田原には、室内楽が公演できる響きの良いホールがないので、今も苦労していますね。

今度、また新しく芸術文化創造センターができるということで、響きの良い、室内楽の演奏会をやってみたい。贅沢かもしれませんが、室内楽やオーケストラの上質な公演。もっと規模が大きくなっても乗れるようなステージが欲しいと思います。コーラスが乗ってると、いまのステージは狭いですね。小ホールも充実したものが欲しいと思います。

あとは、リハールサル室がもっと欲しいですね。ホールに、日常的に我々が活動する場所がほしい。いま私たち合唱団は、高校の音楽室でやっています。それから「市民による音楽フェスティバル」でモーツァルトのレクイエムをやるための練習をしています。主な練習会場が生涯学習センターですが、主な練習場があります。ホール、車やバスで行くという不便がある場所、そういうもの文化活動をする上では必要かなと思っています。

私が常に考えているのは、日常活動なんです。

市民会館で行われた、主な催しもの 昭和37年～42年「広報おだわら」より抜粋

【昭和37年】

こけら落とし「三番叟」菊五郎劇団／日本フィルハーモニー管弦楽団演奏（東急ゴールデンコンサート）／演芸名人芸 落語・奇術・漫才／ジュエチャー／新民謡発表大会／吹奏楽大会／パレー『白鳥の湖』／映画会『静かなるドン』／労音CM例会・室内楽名曲コンサート／工場親睦素人芸能大会／MRA世界大会／労音PM例会ラテンフェスティバル／オリンピック映画会／文学座公演「守銭奴」／小田原フィルハーモニー交響楽団演奏会／労音PM例会・北村維章と東京シンフォニックタンゴオーケストラ

【昭和38年】

労音PM例会・現代のジャズ／平尾昌章・西田佐知子歌謡大会／ニッポン放送公開放送・スターアードスターショー／国際通り商店街御得意様招待演芸会／NHK全国のど自慢神奈川大会／神奈川県柑橘振興夫人大会／MRA石川島播磨重工業労働者劇「一粒の麦」／労音CM例会・花柳徳兵衛舞踊団／労音PM例会・東京パンチョス／こゆるぎ座公演「なよたけ」／宝塚歌劇団花組公演／カネボウ チャーミング・ショー／小田原秀語会／小田原市全市中大売出し招待・ハナ肇とクレイジーキャッツ／北島三郎ショー／渥美利奈舞踊研究生発表会／シグナス合唱団第三回交歓演奏会／三橋美智也ショー／

【昭和39年】

こゆるぎ座公演「吉野の盗賊」／労音B例会「原信夫とシヤープス・アンドフラッツの魅力のすべてを聞く」／労音・労演特別例会「人形浄瑠璃・文楽座」／労演例会「劇団仲間公演『森は生きている』」／こゆるぎ寄席／労音B例会「ボニー・ジャツクス・リサイタル」／労音B例会「劉三姐」／労演例会「文学座三人姉妹」／子ども劇場・テアトル・ファミリー くるみ割り人形／演劇教室「みそつかず物語（劇団風の子）」

【昭和40年】

ペペハラミジヨとそのラテン・アメリカン・リズム／労音B例会 ジャズ・フェスティバル／第7回さかなまつり／第7回市民写真展・第8回宣伝美術展／西湘美術協会創立35周年記念展

【昭和41年】

旭丘高校音楽会／労音B例会「ペギー葉山ショー」／労音A例会「東京交響楽団演奏会」／市民劇場第8回公演 文楽小田原公演／労演例会文化座「炎の人」／山田流箏曲中村緑幸演奏会／労音B例会「丸山明宏」／松竹大歌舞伎公演／労音A例会「パレー白鳥の湖」／現代幼児教育研究会全国大会／富士フィルム家族慰安会／ザ・ベンチャーズ・ショー／労音C例会「東京キウバンボーイズ」／労音B例会「中村八大と松本英彦」／子供音楽コンクール 東京放送ラジオ公開録音／小田原吹奏楽研究会及び小田原混声合唱団クリスマス・チャリティー・コンサート

【昭和42年】

山口音楽事務所「フォークソング・エレキバンド合戦」／柑連「中井一郎氏藍綬褒章受賞祝賀会」／労音A例会「夕鶴」／桐座公演・市民劇場第12回公演「文楽」／ミュージカル「赤い靴」／初代中村緑幸の追善箏曲演奏会／ウィーン少年合唱団公演／劇団角笛「シルエット劇場」／労音B例会「ザ・ピーナッツショー」／労音A例会「パリ祭」／市民劇場第14回公演「松竹大歌舞伎」／日比野雅江舞踊研究所 研究生舞踊発表会／労音例会「バックキー白片とアロハ・ハワイアンズ」／労音B例会「朝丘雪路ショー」／劇団こゆるぎ座第16回公演「破戒」／人形劇団ブーク「青い鳥」／労音B例会「フランク永井リサイタル」／スキー映画会、フォーク・フェスティバル

若者たちに本物を体験してもらいたい 露木一郎さん（シヤム猫カンパニー社長）



ていましてけれど。後藤悦治郎さんと平山泰代さんにふたり来てもらって、なんと私もステージに立って、「赤い鳥」のかたちを作ってやったのが第一回目。千円のチケットを、六百枚。必死で友達みんなに声をかけて来てもらいました。それが第一回目、一九七五年です。

会社を立ち上げて様々な事業をやりましたが、一番思い出ぶかい事業は、一九九一年から八年間続けて行った「ハイスクールライブ」卒業です。地元の高校十一校が、横のつながりで実行委員会を作って企画。高校生たちの自主性を重視して、実行委員会には二百人から三百人くらいが参加しました。ステージに上がるのが三年生。一年生と二年生が企画をします。毎回毎回、満員でございました。お客様が千人くらい入っている中で、これから社会に出て行ったり、この街をこれから離れていったり、就職をしたりする子どもたちが、その時の生のメッセージをステージから伝えてもらおう、という主旨でした。

私が十九歳の時に「露木一郎」で小田原市民会館を借りきたら「アマチュアや未成年には貸せない」ということで、借してもらえなかったんです。その時代、音楽やっていた人間はちよつと不良とか言われていた時代ですから。それで考えたんですね、「個人だと貸してくれないなら、会社にして」と。シヤム猫カンパニーなんて名前をつけたら余計に奇妙なことになっちゃったんですけど(笑)。

会社を設立して、いちばん最初のコンサートは、「赤い鳥から紙ふうせん」。私、「赤い鳥」大好きだったんですよ。労音さんの「赤い鳥」見て。それから結構メンバーたちとも仲良しになりましたね。もう「紙ふうせん」と「ハイ・ファイ・セット」に分かれてしまっ



ステージでの集合写真(第8回)

表現方法は自由で、ほとんどが演奏でしたが、寸劇やダンスもあり、叫んで終わる子もいました。持ち時間は一人七分で、その瞬間の思いを伝える企画でした。本番は、真剣さで真剣さのぶつかり合いだね。上手くない子もいて、七分間に音も出さず演奏しないまま、回り舞台を使っていますから、ぐるーっと



手作りのチラシ(第8回)

回っていった一言も発せずに終わってしまう子もいました。配線を凝りすぎて、音が鳴らなかつた子もいました。アマチュアがコンサートすると観客よりも出演者が多いんですが、それを、千人、二階席も満員の中でやった経験はすごいな、と。そこから旅立ってプロになったミュージシャンや役者になった者もいます。

自分の経験の中で、十九歳の時、小田原市民会館で演奏したいと思って行ったときに、その時代、反戦フォークとか、反体制的な人がギターを持って音楽を演奏するという時代でしたので、なかなかアマチュアが借りに行っても受け入れてもらえない、つまり自分たちの表現をする場がない、その場所を貸してくれることが難しかったです。それで、会社を作って、アマチュアのコンサートをできるだけ、やっぱりプロと同じような仕様のなかでやってもらいたいということによって、「本物」を味わってもらいたいという強い思いでありました。

■市民会館の使う側からの設計思想を問う
漁師

市民会館の大ホールは、昭和三七年(1962年)に開館した。こけら落としは、菊五郎劇団による「寿式三番叟」であった。開館当初は、大ホールで歌舞伎、宝塚歌劇、ミュージカルなど多彩な興業が開催された。

ところが、時代が経つにつれて開館当初の大規模な公演の頻度が減ってしまった。インタビュアーから分かったその理由とは、大ホールの使い勝手の悪さであった。小田原城の景観を重視して低層建築としたため、大ホールの舞台は地下となった。そのため、舞台装置の搬入は搬入口からリフトで地下に降ろさねばならない。楽屋には段差が多く出演者が迷ってしまうほどだった。更に、舞台の上手(向かって右側)には袖がなく、舞台裏もないため、舞台演出上の大きな制約があった。七〇年代になってニューミュージックのツアーコンサート全盛時代になると全舞台セット持込み方式となり、もう市民会館は公演対象とならなくなったそうだ。

市民会館大ホールは、舞台スタッフから非常に評判が悪かった。更に、リハーサル室がないため、市民による準備活動にも支障があった。ホールの設計とは、観客の快適さ追求と同じ重みで、いや、それ以上にスタッフや出演者が快適に活動できるように設計されねばならないと思う。新しい芸術文化創造センターの設計が、この観点でしっかりとレビューされることを願う。

(ライブリー隊員 深野彰)

小田原を見守る写真館の物語 五十嵐史郎さん（五十嵐写真館三代目主人）



五十嵐写真館の初代は私の祖母です。とても気が強く男勝りで、その性格を心配した両親が手に職をつけたほうが良いと考え、横浜野毛の三田写真館に奉公に出すことにしました。そこで祖母は祖父と出会い、駆け落ち同然の形で三田写真館を飛び出しました。その後、横浜大火に遭い、その際に道具が燃えてしまったために、燃え残った1本のレンズと布の看板を持って、小田原の東町にある実家に戻りました。その後、現在と同じ本町に店を構えます。

関東で活躍した下岡蓮杖（1823・1914）という明治時代の著名な写真家がいるのですが、蓮杖は生まれが伊豆の下田で、横浜で写真店を開きました。実家と店の行き来の中で縁があったのか、祖母と蓮杖はとも仲が良かったそうです。当店には画家でもあった蓮杖直筆の掛け軸があり、ロビーに展示しています。

祖母は厳しい性格で、私は子どもの頃に遊んでもらった記憶がありません。父（二代目）が店を継いでからは表に出ることはなく、ネガの整理などをして、すつかりいいおばあさんになっていました。

私は新制と旧制の中学の境目の時、中学4年生で中退しまして、父の厳しい指導を受けることになりました。五十嵐写真館の基礎を

作ったのが祖母で、現在の姿にまで成長させたのが父になります。父と、鈴木十郎市長は大変気が合いました。市長から直々に依頼が

くることもありました。市長が忘れていても、秘書室から行事の案内がありました。大きな行事のほとんどは写真に収めていたと思います。鈴木市長の時代は白黒写真とカラー写真の過渡期で、私は白黒、父はカラーを専門としていました。

小田原市民会館のオープンの時も、鈴木市長に随行して撮影していました。一番に思いつくのは尾上松緑の写真です。松緑が、花道で構えながら舞台を見据えているときの輝きは、実に格好良く写りました。坂本九さんやこまどり姉妹が来たときなど、印象に残る場面はすべてフィルムに収めています。市民会館オープン時のロビーでは、鈴木市長と松竹社長の大谷竹次郎さんがこやかに会話されていて、こちらも写真に収めています。

鈴木十郎市長とは、父とともに私もお世話になったのですが、とても腰が低く、気配りのできる方でした。真鶴道路の渡り始めの時は、私も先導者に乗って撮影しました。こうした撮影は、仕事とは別の、ボランティアのような形でやっていました。

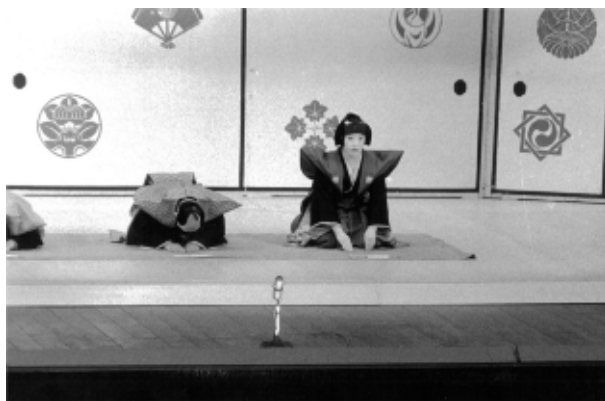
ほかには、天守閣については一から十まで撮影しています。関東大震災で石垣が崩れた小田原城も撮影しています。工事中は毎日通い、鉄骨のやぐらの上に立って見下ろす写真も撮りましたが、現場の職員さんたちは「写真屋さんは、よく怖くないもんだ」と驚いていたそうです。不思議なもので、カメラを構えると怖さがどこかにいってしまふのです。

私にとって写真とは、第一に「記録として後世に残す」ということです。

記録として残すことが第一ですが、営業的な部分となると、その方の一番雰囲気の良い写真を撮る、ということになります。なるべくお客様と応対しながらリラクセスさせるようにしているのですが、そう簡単にリラクセスできるようなものではありません。リラクセスしようとしているのでしようが、「笑ってください」といって笑ってくれるようなこと

はまずありません。笑い顔を撮るには、最低でも五十分は会話する必要があります。そうでなければまずシャッターは切れません。

五十嵐さんが撮影された歌舞伎の舞台
口上を述べる尾上梅幸



五十嵐さんが撮影された歌舞伎の舞台
見得を切る尾上松緑「絵本太閤記」



■五十嵐さんのお話から

気が強く男勝りだった史郎さんの祖母。それを気に掛けた両親が手に職をと考え、野毛の写真館に奉公へ。そこで祖父と知りあい路傍写真生業に。横浜の大火をきっかけに祖母の実家小田原に戻り、五十嵐写真館を始めた。祖母が写真館の基礎を作り父が現在の姿にまで成長させ、息子が四代目を継いでいる現在も妻と一緒に毎日出勤。それが元気の源だとお見受けしました。

「写真を撮ることの意味は？」との問いに「第一は記録として後世に残すこと」と史郎さん。「営業的な部分ではその方の一番雰囲気の良い写真を撮ること。リラクセスして自然な笑顔が出るまでに最低でも五十分は会話しますね。そうでなければまずシャッターは切れません」とおっしゃっていたのが印象的だった。史郎さんの物腰の柔らかさが伝わってくる。

父が鈴木十郎元小田原市長と気が合い、直接写真撮影の依頼が来ることもあった。当時は白黒写真とカラー写真の過渡期。史郎さんが白黒、父がカラー専門だった。カラー写真はリバーサル（スライド）の時代。それをストーリー仕立てにして小田原市立図書館に寄贈した。

小田原市民会館オープン時の撮影が一番思い出されるのは尾上松緑。花道で構えながら舞台を見据える目の輝きは実にかっこよかったそう。歴史が詰まった五十嵐写真館。思い出話を伺いに足を運びたい。（ライブラリー隊員 水間靖子）

おだわらライブラリー通信第貳号

- 発行 小田原市 文化部文化政策課
- 平成26年度文化創造活動担い手育成事業「文化資源発掘ワークショップ」報告書
- 編集 富士原 直也
- 資料提供 小田原市広報聴課（広報おだわらアーカイブ）
シャム猫カンパニー
五十嵐写真館
- 印刷 平成27年3月29日
- 問合せ 0465-33-1706
〒250-8555 小田原市荻窪300番地
文化政策課 芸術文化創造係内
電話 0465-33-1706 / FAX 0465-33-1526

